

農業技術情報

令和元年6月17日

ゆとりみらい21推進協議会指導部会

十勝普及センター十勝東部支所	015-572-3128
J A 幕別町	0155- 54-4118
J A 札内	56-2131
J A 帯広大正	64-4591
日甜幕別原料事務所	54-2756
幕別町農林課	54-6605

各作物の生育・作業の遅速（幕別町6月15日）（ ）内は平年値（※前年値、
☆春小麦は前年6/13実測値）

作物名	遅速日数	生育および作業状況	生育期節
秋まき小麦	早6	草丈 76.5 (75.6) cm 茎数 738 (698) 本/m ²	出穂始 5/31 (6/ 6) 出穂期 6/ 2 (6/ 8) 出穂揃 6/ 4 (6/10)
春まき小麦 （春よ恋）	—	草丈 56.3 (☆68.9) cm 茎数 648 (☆720) 本/m ²	出穂始 6/14 (☆6/20) 出穂期 6/16 (☆6/22) 出穂揃 6/18 見込 (☆6/24)
馬鈴しょ	早4	茎長 23.1 (16.1) cm 茎数 3.5 (3.6) 本	着蕾期 6/12 (6/16)
大豆	早5	茎長 12.1 (5.8) cm 葉数 1.6 (0.5) 枚	出芽期 5/27 (6/ 1)
小豆	早3	茎長 3.8 (2.9) cm 葉数 0.6 (0.1) 枚	出芽始 5/31 (6/ 1) 出芽期 6/ 2 (6/ 5)
菜豆（金時）	早3	茎長 7.4 (4.5) cm 葉数 0.4 (0.1) 枚 は種期 5/31 (6/2) は種終 6/4 (6/7)	出芽始 6/ 6 (6/ 9) 出芽期 6/ 9 (6/12)
てん菜（移植）	早6	草丈 33.5 (26.6) cm 葉数 15.6 (13.8) 枚	
てん菜（直播）	—	草丈 15.7 (※15.9) cm 葉数 8.2 (※8.8) 枚	
牧草	早4	草丈 98.1 (99.0) cm 1 番収穫始 6/10 (6/12)	出穂始 6/ 4 (6/8) 出穂期 6/10 (6/14)
飼料用とうもろこし	早5	草丈 43.1 (28.5) cm 葉数 7.2 (6.2) 枚	
ながいも（マルチ）	早7	植付終 5/25 (6/1)	萌芽期 6/3 (6/10)
たまねぎ	遅2	草丈 28.4 cm (35.0) cm 生葉数 5.2 (5.4) 枚 葉鞘径 9.0 (9.0) mm	

畑 作

<小麦>

「きたほなみ」の生育は5月までの高温により出穂が早く6日進んでいます。
「春よ恋」は5月中の少雨の影響を受け草丈・茎数とも少なく推移しています。
6月2半旬に入ってから日照不足傾向となり開花期間が長引くことが予想されます。引き続き計画的な防除を実施しましょう。

1 赤かび病の防除

秋まき小麦では場内の生育が早い部分に合わせて1回目の防除を実施した場合は、生育が遅い部分や、既に使用した薬剤の使用回数等を考慮し、2回目以降の防除を実施してください。

春まき小麦（春よ恋）の出穂揃は作況ほ場で6/18頃の見込みとなっております。

り、前年よりかなり早まっています。出穂揃が1回目の防除時期となっていますので、表1を参考に適切な防除に努めてください。

表1 赤かび病の防除薬剤例

防除時期		農薬名	系統名	使用濃度 (倍)	使用時期	回数 (以内)	
春小麦	1回目	出穂揃	バラライカ水和剤	フタルイミド DMI	500	収穫14日前	2回
春小麦 秋小麦	2回目	1回目の 7日後	ベフトップジンフロアブル	ビスグアニジン ベンゾイミダゾール	800~ 1,000	収穫14日前	1回 (出穂後)
	3回目	2回目の 7~10日後	シルバキュアフロアブル	DMI	2,000	収穫7日前	2回
	臨機	登熟期間	チルト乳剤25	DMI	1,000~ 2,000	収穫3日前	3回 (春季以降)

※DMI剤は、小豆、菜豆、はくさい等に薬害が生じる可能性があるため飛散に注意。

※DMI剤の連用は極力避け、使用回数も最小限とします。

2 アブラムシ類・ムギクロハモグリバエの防除

ほ場を十分に確認して、薬剤防除の要否を検討しましょう。

【要防除水準】

アブラムシ：ほ場のおよそ半分以上の穂で寄生が観察された場合に防除する（薬剤は6/3付技術情報参照）。

ムギクロハモグリバエ：上位2葉が約半分食害された茎がほ場の16%を超えた場合に要防除水準となるので、被害が懸念される場合はJAまたは普及センターに相談して下さい。

3 葉面散布による窒素追肥について

適正タンパク値の確保や粒重の増加を目的として窒素の葉面散布を行う場合、「尿素使用の場合は1.0~1.5%液を3回（窒素成分で1回0.5~0.7kg/10a）」で検討してください。

4 小麦「なまぐさ黒穂病」への注意

十勝では発生が確認されていませんが、注意が必要です。「なまぐさ黒穂病」に汚染された収穫物が乾燥貯蔵施設に混入した場合、施設全体が汚染されることとなり出荷不能になるなど、大きな被害をもたらします。感染している場合、乳熟期までには外観から症状が確認できるようになりますので、下記を参考に、万が一疑わしい株を発見したら、JAあるいは普及センターにお知らせください。

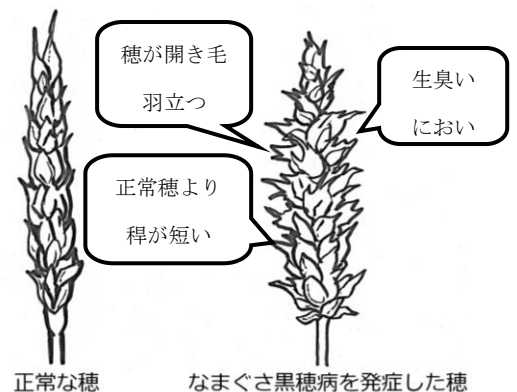


図1 なまぐさ黒穂病の特徴

<てん菜>

中耕により地温上昇を図るとともに、畦間が茎葉で覆われる前までにほ場や降雨の状況を踏まえ、最終の中耕を終えましょう。中耕時、株元まで土を寄せると根腐病の発生を助長するので注意しましょう。

1 根腐病の防除<<6月中旬～7月上旬までを目途に>>

「連作・短期輪作ほ場」及び「前回作付時に根腐病が多発したほ場」、「排水性の劣るほ場」では、必ず防除を実施してください。上記の条件で、曇天によりほ場の湿潤状態が続く場合は、2回目の根腐病防除を検討しましょう。

表2 根腐病の防除薬剤例

農薬名	系統名	使用濃度 (倍)	使用時期	回数 (以内)	薬剤特性
モンセレン顆粒水和剤	フェニルウレア	1,000	収穫30日前	4回	予防
リンバー顆粒水和剤	SDHI	4,000	収穫7日前	3回	浸透・予防・治療
アミスター20 フロアブル	QoI	1,500～ 2,000	収穫14日前	3回	浸透・予防・治療

2 アブラムシ類・ヨトウガの防除

アブラムシの発生を確認しています。今回の防除は、ヨトウガとの同時防除で行うため、下記薬剤で実施をお願いします。期間は日甜ハガキ参照。

表3 アブラムシ・ヨトウガの防除薬剤例

農薬名	系統名	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	回数 (以内)
モスピランSL液剤	ネオニコチノイド	4,000	収穫3日前	3回

*モスピランSL液剤はヨトウガの若齢虫のみ効果があるので、遅れないよう注意しましょう。

3 中耕

ア 土壌の膨軟化と地温の上昇及び透水性の改善と畦間の除草のため、「カルチ」・「畦間サブソイラ」などを早期に施工し、初期生育の促進に努めましょう。

イ 中耕作業の深さと広さは根の広がりを確認し、生育初期には浅めに調整し、次第に狭く深くして畦間が茎葉で覆われる時期(草丈35cmまで)までに実施しましょう。

ウ 中耕時、株元まで土を寄せると根腐病の発生を助長するので注意しましょう。

4 除草剤散布

ア 除草剤のポイントは適期処理にあります。気象条件や土壌水分等を考慮し、実施しましょう。

イ 直播てん菜は移植栽培と登録基準が異なるので注意しましょう。

※日甜ハガキ情報や「農作物病害虫防除基準・除草剤使用基準」を参照して適切な防除を実施してください。

<ばれいしょ>

本年は着蕾期が6/12（平年6/16）と早い傾向にあり、疫病の初発もやや早くなることが見込まれます（FLABSによる予察地点・相川〔萌芽期5/24〕では予測初発日6/23）。予防的防除を必ず実施しましょう。また、既に感染が疑われる場合は、治療効果のある薬剤を使用してください。

1 疫病の防除

ばれいしょ疫病菌は10℃を超えると活動が始まり、最適気温18～20℃の多湿条件で多発します。特に、冷涼多湿な環境や水たまりのできやすい凹地（排水不良箇所）、トラクタの車輪のぬかるんだところ（防除畦など）、生育が過繁茂気味のほ場や風通しの悪いところ・山あい・防風林の影などでは発生しやすく注意が必要です。ほ場をよく観察し、基本は予防防除に努めてください。

- ア 初発前に必ず防除：ほ場をよく観察し、基本は予防防除に努めてください。
- イ 初回の防除前に感染が疑われる場合：治療効果のある薬剤を使用。
- ウ 作物の生育に応じた薬剤選択：茎葉の生長段階では浸透移行性のある薬剤を使用。
- エ 降雨に応じた薬剤選択：ほ場に入れたい状況が予想される場合は、Wインターバル（14日間隔）効果のある薬剤※の使用を検討してください。実施する場合は、初発前から散布してください。

※「リライアブルフロアブル 800倍」、「プロポーズ顆粒水和剤 750倍」、「ライメイフロアブル 2,000倍」、「レーバスフロアブル 1,500倍」、「ランマンフロアブル 1,000倍」、「フロンサイドSC 1,500倍」（平成25年度指導参考）。

表4 疫病の防除薬剤例（出典：くみあい農作物病害虫・雑草防除ガイド）

農薬名	系統・分類名 ※1	使用濃度(倍)	使用時期 (収穫前)	回数 (以内)	浸透移行性 の有無	効果の 発現
マンゼブ剤	マンゼブ	400～600	7日	10回	×	予防
リライアブルフロアブル	アシルピコリト [®] 系 カーバメート系	800～1,000	7日	3回	○ ○	予防 治療
ゾーベックエニケード	オキサチア ピプロリン	5,000	7日	2回	○	予防 治療
フロンサイドSC※2	フルアジナム	1,000～ 2,000	7日	4回	×	予防

※1 薬剤名が異なっても、成分（分類）が同じ場合は連用を避ける。各薬剤成分を考慮したうえ、総使用回数を遵守し、ローテーション防除を心がける。

※2 「フロンサイドSC」は1,000倍で菌核病、2,000倍で夏疫病に登録あり。花の落ちる時期に合わせて検討する。

2 軟腐病の防除

軟腐病は高温多湿条件で多発しますが、本格的な軟腐病防除は、開花期以降（7月上中旬）となります。そのため、早い時期の疫病防除に併せて実施する必要はありません。ただし、強風や培土作業等で茎葉が傷ついた場合は、傷口からの感

染を防ぐため防除を実施しましょう。初期防除の徹底に心がけ、生育量に応じて散布水量を調節しましょう。

表5 軟腐病の防除薬剤例

農薬名	系統・分類名	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	回数(以内)	効果の発現
スターナ水和剤	オキシリニック酸※	1,000	7日	5回	予防治療
バクテサイド水和剤	オキシテトラサイクリン・ストレプトマイシン・銅	750~1,000	7日	5回	予防治療
マテリーナ水和剤	ストレプトマイシン オキシリニック酸※	1,000	7日	3回	予防治療
カスミンホ [®] ルド [®] -カッパーシン水和剤	銅 カスガマイシン	500~800	7日	3回	予防治療
バイオキーパー水和剤	生物農薬	1,000	発病前~発病初期	-	予防

※オキシリニック酸に対する低感受性菌が出現している地域があるので、連用は避ける。

※オキシリニック酸を含む剤の使用は合計5回まで。

3 アブラムシ類・オオニジュウヤホシテントウ・ナストビハムシの防除

本年はアブラムシの発生期が「早」、発生量は「多」と予想されています(北海道病害虫防除所「6月予報」)。林地や防風林近くの多発に注意し、ほ場をよく観察し、害虫の発生状況に応じて防除を実施してください。

表6 アブラムシ類・オオニジュウヤホシテントウ・ナストビハムシの防除薬剤例

農薬名	系統名	対象害虫			使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	使用回数(以内)
		アブラムシ類※	オオニジュウヤホシテントウ	ナストビハムシ			
モスピランSL液剤	ネオニコチノイド	◎(ワタ)	◎	◎	4,000	7日	3回
アドマイヤー顆粒水和剤	ネオニコチノイド	◎ (ジャガ/モモ/ワタ)	◎		5,000~15,000	14日	2回
アクタラ顆粒水溶剤	ネオニコチノイド	◎3,000倍 (ジャガ/ワタ)	○	◎ 2,000倍	左記参照	14日	3回
ベジホン乳剤	ピレスロイド 有機リン	◎ (ジャガ1000/ ワタ2000倍)		◎ 1,000倍	左記参照	30日	2回
ペイオフME液剤	ピレスロイド	◎ (ジャガ2,000/ ワタ1,000倍)	◎	○	2,000	7日	4回
ゲットアウトWDG	ピレスロイド	◎ (ジャガ/モモ)		◎	2,000~3,000	7日	4回
マブリックEW	ピレスロイド	◎(ジャガ)			4,000	7日	2回
モベントフロアブル	テトロン酸	◎(ワタ)			4,000	7日	3回
ウララDF	同翅目摂食阻害剤	◎ (ジャガ/ モモ/ワタ)			4,000	7日	2回
コルト顆粒水和剤	その他	◎ (ジャガ/ モモ/ワタ)			4,000	前日	3回

※ジャガ：ジャガイモヒゲナガアブラムシ、モモ：モモアカアブラムシ、ワタ：ワタアブラムシ
 ※◎は登録があり、道ガイドに掲載されているもの、○は登録があるもの（以下、同じ）
 ※モベントフロアブルは銅ストマイ水和剤とは混用しない（ストレーナに付着物が生じる）。
 また、ストレプトマイシン含有殺菌剤との混用の場合は、モベントフロアブルを先に希釈する。

<豆 類>

6月15日現在の生育は平年よりも早い傾向です（大豆；早5日、小豆；早3日、金時；早3日）。地温の上昇を図り、中耕の実施により生育を促進しましょう。

1 中耕

初期生育を確保するために、除草剤の残効を考慮しながら、暖かい日に中耕を実施し地温の上昇を図りましょう。

また、遅い中耕や培土は、断根による養分吸収阻害の程度が大きくなるので、開花始10日前まで（7月上中旬頃）には最終の培土を終えましょう。

2 大豆「わい化病」・菜豆「黄化病」（ジャガイモヒゲナガアブラムシ）の防除
 病害虫発生予察情報によると、ジャガイモヒゲナガアブラムシの発生期は「早」・発生量は「多」と、飛来時期は早い予測となっており、幕別町でもごく一部で既に飛来が確認されています。*5/16号を参照し防除を実施して下さい。

3 小豆「茎疫病」の防除

連作ほ場や排水の劣る場所で発生することがあります。発病後の茎葉散布では効果が得られないため、発生が予想されるほ場は、予防防除や溝切りによる排水を実施してください。

表7 小豆「茎疫病」の防除薬剤例

農薬名	系統・分類名	使用濃度(倍)	使用時期 (収穫前)	回数(以内)
フェスティバルC 水和剤	CAA 無機化合物	600	7日	3回
ランマンフロアブル	Qil	1,000	7日	3回
レーバスフロアブル	CAA	2,000	7日	3回
リドミルゴールドMZ	ジチオカーバメート フェニルアミド	500	30日	3回

4 小豆のアブラムシ類の防除

マメアブラムシの飛来が一部確認されています。局所的に多発生するので、ほ場をよく観察し生長点近くに寄生を確認したら早急に防除してください。

表 8 小豆のアブラムシの防除薬剤例

農薬名	系統名	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	回数(以内)
モスピランSL液剤	ネオニコチノイド	2,000~4,000	14日	3回
ゲットアウトWDG	ピレスロイド	3,000	7日	3回
ペイオフME液剤	ピレスロイド	2,000	7日	3回

5 菜豆（金時）「かさ枯病」の防除

かさ枯病に罹病すると本葉に赤褐色の斑点が生じ、周辺部が黄色くなり葉脈はすじ状に赤褐色を呈し激しい場合は株が黄変し枯死します。本病は低温多湿で発生しやすく、機械管理作業の接触でまん延します。発生が予想される場合は 6/3号を参照し防除して下さい。

6 菜豆の「根腐病」発生時の対策

発芽後数週間で感染が起こり、6月中～下旬に降雨と高温が続くことで発病が激しくなります。発病株を発見したら、健全部の新根の発生を促すため、早期に培土しましょう。

野 菜

<レタス>

(1) 菌核病・すそ枯病・べと病の防除

低温多湿条件が続くと、菌核病、すそ枯病、べと病の発生を助長します。予防防除を実施してください。

表1 レタス菌核病・すそ枯病・べと病の防除薬剤例

病害名	薬剤名	系統名・成分名	使用濃度(倍)	使用時期	回数(以内)
菌核病	ゲッター水和剤	チオファネートメチル・ジエトフェンカルブ	1,500	収穫7日前	2回
	アミスター20フロアブル	QoI	2,000	収穫7日前	4回
すそ枯病 べと病	ダコニール1000	有機塩素(TPN)	1,000	収穫14日前	3回

(2) 腐敗病の防除*

腐敗病防除は高温多湿条件で発生が助長されます。今後に備えて、予防防除を実施してください。

(3) ナモグリバエの防除*

ナモグリバエは平均気温が15~20℃になる6月中~下旬から成虫の発生が多くなるため、注意が必要です。

※薬剤については、「6月3日技術情報もしくは平成31年度農作物病虫害防除基準」を参照。

<キャベツ、はくさい>

(1) コナガの防除

・コナガの成虫が6月5日~10日の5日間で、キャベツほ場で28頭、はくさいほ場で142頭誘殺されています。発生が増加傾向にあるため、防除を行ってください。

※薬剤については、「6月3日技術情報もしくは平成31年度農作物病虫害防除基準」を参照。

・コナガは薬剤抵抗性がつきやすいので、同一系統殺虫剤の連用は避けましょう。

<だいこん>

(1) 亀裂褐変症と軟腐病の予防防除

多湿条件で気温が高くなると、亀裂褐変症や軟腐病の発生しやすい条件となるため、今後注意が必要です。

表2 亀裂褐変症の防除例

防除目安時期	薬剤名	成分名	使用濃度(倍)	使用時期	回数(以内)
は種後20日目	バシタック水和剤75	メプロニル	1,000~1,500	収穫21日前	3回

表3 軟腐病の防除

防除目安時期	薬剤名	成分名	使用濃度(倍)	使用時期	回数	注意事項
は種後25日目	Zボルドー	塩基性硫酸銅	500	—	—	クレフノン200倍を加用する。

(2) キスジノミハムシ(ジノミ)の防除

は種後の粒剤施用に加えて、茎葉の防除を徹底してください。

表4 キスジノミハムシの防除薬剤例

は種後	薬剤名	系統名	使用濃度(倍)	使用時期	回数(以内)	注意事項
20日目	エルサン乳剤	有機リン	1,000~2,000	収穫30日前	2回	・散布時期に注意する。
30日目	ベネビアOD	ジアミド	2,000	収穫前日	3回	・銅剤の混用、展着剤の加用で薬害を生じる恐れがあるため、注意する。

<ながいも>

(1) マルチ栽培での芽やけ対策（スリットからの芽出し）

ほ場の見回りをこまめに行い、マルチのスリット部に芽が引っ掛かっているものは速やかに出して、芽やけ（高温障害）を防ぎましょう。

<たまねぎ>

草丈、葉数ともに平年値を下回り、生育はやや緩慢です。生育の進んでいるほ場では、オニ皮となる8葉目が出てきたため、除草剤処理は避けましょう。

(1) ネギアザミウマの防除

本年はネギアザミウマの発生が早く、発生量も多い状況にあります。引き続き、ほ場を確認しながら防除を行ってください。

※薬剤については、「6月3日技術情報もしくは平成31年度農作物病害虫防除基準」を参照。

(2) 白斑葉枯病の防除

例年、6月下旬から発生が多くなるため注意が必要です。

表5 白斑葉枯病の防除薬剤例

薬剤名	系統名・成分名	使用濃度(倍)	使用時期	回数(以内)	注意事項
フロンサイドSC	フルアジナム	1,000~2,000	収穫3日前	5回	—
オルフィンフロアブル	SDHI	2,000	収穫前日	3回	—
ファンタジスタ顆粒水和剤	QoI	2,000~3,000	収穫前日	5回	小菌核病は2,000~4,000倍で登録あり。

(3) ベと病の防除

- ・ベと病の発生条件・・・気温が20℃以下の高湿度条件で胞子を形成し、感染します。感染時期は6月中～下旬、発病は7月上旬頃です。
- ・感染前の防除が効果的です。6月中旬～下旬頃にマンゼブ剤による予防防除を行いましょう。過去に発生が見られたほ場では必ず実施してください。
- ・発生しやすい場所・・・川霧の発生しやすいほ場、滞水しやすいほ場など。

表6 ベと病の防除薬剤例

薬剤名	成分名	使用濃度(倍)	使用時期	回数(以内)	注意事項
グリーンダイセンM水和剤	マンゼブ※	400~600	収穫3日前	5回	・予防防除
リドミルゴールドMZ	マンゼブ※・メタラキシル	1,000	収穫7日前	3回	・発生時のみ使用する。

※マンゼブを含む薬剤の使用回数は、合計で5回以内。

～ ～ 農薬の安全使用と農作業安全に努めよう！！ ～ ～

□ 農薬危害防止活動の実施

- ★農薬の使用基準や注意事項を確認し遵守しましょう。
- ★除草剤散布など、スプレーヤを使用する際には周辺作物への飛散防止に努めましょう。
- ★農薬は必ず保管庫にしまい、カギをかけましょう。
- ★使用した農薬容器や袋は、適切に処理しましょう。
- ★農薬散布の際は、マスク、防除衣、ゴム手袋、帽子、防除用メガネ、長靴、肌を覆うタオルを身につけ、しっかり安全対策をとりましょう。

□ 春の農作業安全運動強調月間（４～６月）

農作業の遅れによる「焦り」や長時間作業の疲れによる「不注意」などに伴う農作業事故の発生が懸念されます。

- ★機械の調整・整備等は、必ずエンジンを止めましょう。
- ★必ず機械を止めてから乗り降りしましょう（飛び乗り、飛び降りはない）。
- ★二人以上で作業する時や危険と思われる作業に入る前には、必ず声を掛け合いましょう。